

## 柄谷行人著『力と交換様式』

大場, 健司  
九州共立大学共通教育センター : 講師

<https://doi.org/10.15017/7181945>

---

出版情報 : 九大日文. 42, pp.44-46, 2023-10-01. 九州大学日本語文学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 柄谷行人著『力と交換様式』

大場 健司<sup>オホバ ケンジ</sup>

柄谷行人（一九四一年）は「正統派マルクス主義」には還元され得ない、自由な諸個人の「アソシエーション」(Association)を提示してきた稀有な批評家だと言つてよい。筆者（大場）は拙著『1960s 失踪するアメリカ——安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』（春風社、二〇〇三年二月）において、安部公房（一九二四—一九九三年）やポール・オースター（Paul Auster, 1947）の文学をアナキズム（Anarchism）の視座から論じたが、その際に思想的枠組みとしたのが、ジャン＝ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre, 1905-1980）、及び柄谷行人の思想であった。それは、サルトルと柄谷が共通して「資本」(Capital)や「国家」(State)に抵抗する実存主義（Existentialism）的な「自由」を提示していたからであった。その「自由」とは、「新自由主義」(Neoliberalism)と言う時の「自由」とはまったく異なるものである。

かつて一九八〇年代の日本でポストモダン（Postmodern）が流行し、浅田彰（一九五七年）らのニュー・アカデニズム（New Academicism）はしばしば消費社会論的な枠組みで「消費」されてきたと言つてもよい。当時の柄谷は『探求Ⅱ』（講談社、一九八九年六月）において、「交通」や「交通空間」というキー・タームを「国家」や「共同体」を否定するために用いていた。その際

に、「共同体の《空—間》としての海Ⅱ砂漠」（交通空間）が「船乗りⅡ商人」らの「都市」になぞらえられていたが（柄谷行人「交通空間」『『探求Ⅱ』講談社学術文庫、一九九四年四月）三二五頁、このことは「交通」という語がもつばら「商品交換」を指して用いられていることを意味する。しかしながら、『探求Ⅱ』において既に「贈与」が、レヴィ・ストロース（Claude Lévi-Strauss, 1908-2009）に反して「社会的な交換の一樣態」Ⅱ「交通」として提示されていたように（三六四頁、柄谷は資本主義の「商品交換」には還元され得ない「交通」を提示してきたと言つてもよい。その際に柄谷が用いたのが、「交換様式」というキー・タームであった。

周知のように、柄谷は『世界史の構造』（岩波書店、二〇一〇年六月）の時点で、「交換様式」をA、B、C、Dの四種類に区分して吟味している。「交換様式A」とは「ネーション」(Nation)における「互酬」（贈与と返礼）のことであり、「交換様式B」は「国家」における「略奪と再分配」（支配と保護）、「交換様式C」は「資本」における「商品交換」（貨幣と商品）、「交換様式D」は「交換様式Aの高次元での回復」を指す（柄谷行人「交換様式論」『世界史の構造』岩波書店、二〇一〇年六月）一四—一五頁。すなわち柄谷は、カール・マルクス（Karl Marx, 1818-1883）が用いた「交通」(verkehr)の概念を、①「生産様式」ではなく「交換様式」(消費)の観点から見直し、②資本主義における「商品交換」には還元され得ない「交換様式D」Ⅱ「アナキズム」を提示しているのである。

以上のような、ポストモダン後に「資本」と「国家」を否定する柄谷の思想は世界的に評価されており、二〇二二年には「哲学のノーベル賞」とも呼ばれるバーグルエン賞 (Bergruen Prize) を受賞している。その受賞理由として、「グローバル資本主義が問題を抱え、民主主義国家が危機に瀕し、自己批判のほとんどのナシヨナリズムが復活している現代」(the current era of troubled global capitalism, crisis in democratic states, and resurgent but seldom self-critical nationalism) におこつて、柄谷の思想が重要だといふことが挙げられている (「Bergruen Prize for Philosophy and Culture: Bergruen Institute, <https://www.bergruen.org/prize>, 二〇二三年八月二〇日参照、拙訳)。このことは「グローバル資本主義」(Global Capitalism) が存続不可能なほど危機的状況にあり、柄谷の思想が「資本」と「国家」を相対化するための国際的な羅針盤となつていふことを意味するだろう。

そして、『世界史の構造』で提示された「交換様式D」の可能性を更に吟味したのが、この書評で考察する『力と交換様式』(岩波書店、二〇二二年一〇月)であった。次に、『力と交換様式』のポイントを示していく。

まず、マルクス主義 (Marxism) における経済的下部構造としての「生産様式」では説明しきれない観念的上部構造があることが示されている。そして、その先達として名前が挙げられるのが、マックス・ヴェーバー (Max Weber, 1864-1920) とジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) である。すなわち、経済的動機のみが人間の行動を決定するわけではないということ

だ。柄谷はここに、「生産様式」ではなく「交換様式」から来る「力」を見いだしている。ここでは次のようなポイントを挙げる事ができよう。まず、①マルクスの「交通」の概念に影響を与えた思想家としてモーゼス・ヘス (Moses Hess, 1812-1875) が再評価されている点。次に、②ジャック・デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) の『マルクスの亡霊たち』(Spectres de Marx, 1993) において考察された「亡霊」が「交換様式」に由来するものであることを示している点。特に、モーゼス・ヘスが人間と自然の間の「交通」を考えていたことに言及があることが興味深い。斎藤幸平 (一九八七年) の『大洪水の前に——マルクスと惑星の物質代謝』(堀之内出版、二〇一九年四月) を引用するまでもなく、地球における環境破壊は喫緊の課題だからである。

本書では、「世界史」の視座から「交換様式」が論じられている。遊動的な狩猟採集民が定住すると、権力者が生まれるなどの問題が生じた。この問題を解決するために(フロイト的「原父殺し」、平等な贈与交換(交換様式A)が行われた。そして共同体が拡大し、首長制社会が生じると、「カリスマ的支配」(ヴェーバー)によって支配と服従(交換様式B)という国家の官僚制が生じる。国家が発展するに当たつて必要としたのが交易(交換様式C)であった。この「国家」(交換様式B)と「資本」(交換様式C)に抑圧された自由で平等な社会の可能性(交換様式D)を示したのが、「アジール」(Asylum)や「普遍宗教」であったという。

ここでは、この「交換様式D」⇨「アソシエーション」が人

間の意識を超えた「向こうから」(三九五頁) やつて来ることが示されている。すなわち、人間が「交換様式D」を目指したところで、それは「交換様式A」にならざるを得ないかもしれない。しかし、「D」は抑圧されながらも回帰するのだ。

このことは次のことを意味する。すなわち、今後、更に大きな戦争が幾度も起こるかもしれない。しかし、その度にフロイト的「死の欲動」がもたらす「反復強迫」によって自律的な「超自我」が形成されるだろう。柄谷の『憲法の無意識』(岩波書店、二〇一六年四月)に即して言えば、それは戦争を否定する「憲法九条」のようなものだ。そして本書では、それがエルンスト・ブロッホ (Ernst Simon Bloch, 1885-1977) の言う「未だ——意識されないもの」、すなわち「未意識」によってもたらされるのだという(三八六頁)。

次に、文学・文化研究の視点で興味深かった点について感想を述べたい。「アソシエーション」の「希望」を、ブロッホは「希望」と呼び、「その痕跡を人類史における各所に探究するような仕事を続けたのである。中でも、大著『希望の原理』では、世界的に宗教、哲学、文芸、サブカルチャーなどを通して、多種多様な「希望」の痕跡を追求した」(三八三頁)。

ブロッホが行なった「希望」の「痕跡」の探究。これこそが、「批評」においてのみならず文学・文化研究においても必要なものなのではあるまいか。それは、デヴィッド・グレーバー (David Graeber, 1961-2020) が人類学において行なったようなことを、「文学」や「文化」の領域においても行うことだろう。

## ■目次

### 序論

#### 第一部「交換から来る「力」」

##### 予備的考察「力とは何か」

##### 第一章「交換様式Aと力」

##### 第二章「交換様式Bと力」

##### 第三章「交換様式Cと力」

##### 第四章「交換様式Dと力」

#### 第二部「世界史の構造と「力」」

##### 第一章「ギリシア・ローマ(古典古代)」

##### 第二章「封建制(ゲルマン)」

##### 第三章「絶対王政と宗教改革」

#### 第三部「資本主義の科学」

##### 第一章「経済学批判」

##### 第二章「資本主義の科学1」

##### 第三章「資本主義の科学2」

#### 第四部「社会主義の科学」

##### 第一章「社会主義の科学1」

##### 第二章「社会主義の科学2」

##### 第三章「社会主義の科学3」

(二〇二三年一〇月 岩波書店 四二八頁 三八五〇円＋税)

(九州共立大学共通教育センター講師)